

令和３年度第２回 千葉市史跡保存整備委員会
議 事 録

１ 日 時 令和４年１月２７日（木） 午前１０時００分～午前１１時３０分

２ 場 所 Zoom によるオンライン会議
会場：千葉ポートサイドタワー６階 ６０２会議室

３ 出席者 【委員】

青木委員長、設楽副委員長、赤坂委員、今村委員

高橋委員、谷口委員、中村委員

※委員はオンライン参加

【事務局】

（生涯学習部）佐々木部長

（文化財課）佐久間課長、森本主査、須賀主任主事、米倉主任主事

（加曽利貝塚博物館）神野館長

（埋蔵文化財調査センター）西野所長

４ 議 題

（１）特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（案）について（答申）

５ 議事の概要

（１）議題について、委員から附帯事項付の答申があった。

６ 会議経過

【開会】

（事務局：森本主査）

定刻となりましたので、ただいまより、「令和３年度 第２回 千葉市史跡保存整備委員会」を開催いたします。私は、本日の進行を務めさせていただきます 文化財課 主査の森本です。どうぞよろしくお願いいたします。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、会議にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。本日は７名の委員全員にご出席いただいております。委員半数以上のご出席をいただいておりますので、千葉市史跡保存整備委員会設置条例第５条第２項により、会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。本委員会は 千葉市情報公開条例第２５条に基づき会議を公開しております。議事録につきましても、同じく公開することとなっておりますので、事務局が作成した案を出席委員にご確認いただき、委員長の承認により確定いたします。傍聴人の方はお配りした傍聴要領をご確認の上、お守りいただきますよう、お願い申し上げます。

なお、換気やマスク着用など新型コロナウイルス感染症の対策を十分に講じながら、会議を進めてまいります。恐れ入りますが、委員の先生方にはオンラインでのご参加をいただいておりますので、ご発言前に氏名を仰っていただくようお願いいたします。

はじめに、教育委員会を代表して、生涯学習部長の佐々木より一言ご挨拶を申し上げます。
(事務局：佐々木部長)

ただ今、ご紹介いただきました生涯学習部長の佐々木でございます。令和3年第2回千葉市史跡保存整備委員会の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

委員の皆様におかれましては、ご多忙のところ、本委員会にご出席いただき、誠にありがとうございます。本日は、令和2年7月に本委員会に諮問した特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画について、取りまとめのご審議をいただきたいと考えております。

このたびの特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画は、約50年ぶりとなる新博物館の整備ということで、庁内はもとより、様々な関係者との調整に時間を要する形となりましたが、委員皆様方のお力添えによりまして、おかげさまでこの度の最終案を取りまとめることとなりました。大変ありがとうございました。

本年は令和3年の千葉市制施行100周年の節目の年から新たな千葉市の100年に向けて歩み出す最初の年となりますが、新博物館整備を通して、縄文社会の持続可能性に学び、魅力あふれる千葉市の礎となるよう、市が一丸となって計画を推進して参りたいと考えております。

結びとなりますが、これまで熱心にご審議いただいた青木委員長をはじめ、委員の皆様方に重ねて感謝申し上げますとともに、引き続き、それぞれご専門のお立場から、ご助言等いただきますようお願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

本日は、よろしくどうぞお願いいたします。

(事務局：森本主査)

それでは、次第に従いまして、これより議題に入らせていただきます。

ここからの議事進行は、青木委員長にお願いいたします。

【議題1 特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（案）の答申について】

(青木委員長)

それではよろしくお願いいたします。本日はオンラインでの会議ですので、挙手された場合、私の方で気づかない可能性がありますので、発言される際にはお声かけしていただきますよう、お願いいたします。

それでは議事を進めさせていただきます。「議題1 特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（案）の答申について」、事務局より説明をお願いします。

〔事務局説明：資料1 特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（案）について 説明。〕

(青木委員長)

今、ご説明があった通り、中間とりまとめ（案）からいろいろ議論させていただいて、今のよう形で修正されています。

これらについて、委員の皆様からのご意見伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

(設楽副委員長)

いくつかあるのですが、5頁で特徴が9つ挙がっています。特徴4の意図はどういう意図でしょうか。配列の問題ですが。

(事務局：佐久間課長)

それは、内容は良いとしても配列が好ましくないという趣旨でしょうか。

(設楽副委員長)

特徴の4と9は、両方とも教育普及に関わる考えですので、これはセットにしたほうがいいのではないかと思います。特徴の4は8にして、内容をすくい上げるということで、次頁の一覧表は適宜変えていただくのがいいのではないのでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

順番は設楽委員がおっしゃるとおり、4と8の親和性が高いのですが、保存活用計画でこの順番で整理しているので、それを踏襲した形になっています。

(設楽副委員長)

そういう理由でしたら結構です。他に気づいたのが、6頁の上の3行は文章が少しわかりづらいです。いろいろなものが並列されていて、それを保存、継承という形で括っていますが、これは分けたほうが良いのかと思いました。

「これらの特徴をあらわす遺構・遺物や自然環境を適切に保存し、さらには調査や研究及びその成果を発展的に継承するとともに」というのを2つに分ける。恐らく調査記録成果というのはいろいろなデータや報告書を保存して継承していくことにしていると思いますが、もちろんそれは大事ですので、及びその成果ということで一文を加えておけばいいのかなと思います。

この文章の中には、調査研究そのものを積極的に展開していくという意味が欠落しています。それが大事なわけですから、まずは調査研究をやるということがわかるように文章を書き換えたほうが良いと思いました。

(青木委員長)

今のところはどうでしょうか。直す方向で良いですか。

(事務局：佐久間課長)

はい。ただ、今日は最終的な取りまとめをお願いしている場所ですので、できましたら先生方から代替案を具体的にお示しいただけると助かります。

(青木委員長)

それでは設楽委員、今のご指摘の部分は具体的な文章を考えていただき、事務局へお知らせください。

(設楽副委員長)

それでは ZOOM のチャット機能で会議出席者の皆さんにもわかるように共有させていただきます。

(青木委員長)

ありがとうございます。他にございますか。

(谷口委員)

4 頁について、一番上の(2)、本計画の目的と位置付けのアの目的のところの文言ですが、2 行目の千葉市立加曽利貝塚博物館とありまして、現在の博物館の正式な名称と思いますが、その2 行下に「特別史跡加曽利貝塚新博物館」となっておりまして、これを見るとこれが新しい博物館の正式な名称になるような印象に見えます。博物館の名称について、内容については細かく議論してきましたが、名称はどういう原案でどうしていかきちゃんと議論して来なかったと思います。この点はどうでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

博物館の新しい名前については、今後条例改正も行うので、正式な名前を決めさせていただくことを考えております。「特別史跡加曽利貝塚新博物館」が、新しい名称ではございませんので、それについては今後決めていく形になります。

(谷口委員)

それであれば、この部分は補足が必要じゃないでしょうか。今後博物館の正式名称は決めていくというのは付記されたほうがよろしいと思います。いかがでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

行政的には(仮称)と付ける場合もあるのですが、あくまでもこの計画案に示している「特別史跡加曽利貝塚新博物館」は、特別史跡加曽利貝塚の新しい博物館の基本計画であるというレベルで、名称にはならないというのを表現しているつもりでした。それでご容赦いただければと思います。

(青木委員長)

今の議論は私とやり取りした経緯があります。「新博物館」が仮称ということは了解をしています。どう表記するか議論があったのですが、最終的には教育委員会側でその認識があるならば、仮称等は入れずにこの形でいきますかということで取りまとめであります。(仮称)を入れたほうがいいのでしょうか。それがまとめやすいのかどうか。

(事務局：佐久間課長)

(仮称)を入れると、名前をどうするか議論が起きかねないと考えております。あくまでも加曽利貝塚に関する新博物館という、このままの名前で計画していきたいというのが考えです。

(青木委員長)

名称は今後考えるということで、これは了解していただけませんか。

(谷口委員)

この基本計画案の文言はこのままで良いと思いますが、今後どうやって決めていきますか。その説明をいただけますか。私たち委員は今後名称に関する議論にも関わっていくことになるのでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

名称自体は条例の中で決めていくことになりますので、最終的には議会の議決になりますが、当然名称は附属機関の中でもご検討いただいた上でと考えます。名前の諮問・答申という形かは今後の検討ですが、必ず委員にはご意見いただくようにしたいと考えております。

(谷口委員)

名称はとても大切なもので、行政的な手続きとして名前が決まっていくそのルールは今の説明で分かったのですが、それについてこの検討委員会が検討なり意見を述べる機会がないというのは違和感があります。

(事務局：佐久間課長)

そういったことはまったくありません。例えば今後の進め方として、この他にも愛称を付けるのかとかいう話も出てくると思いますし、愛称を付けたら市民から公募することもあるかと思えます。どういった名称を付けるかは今後の課題なのですが、市民から公募するか、公募する前提として「加曽利を外せない」とか「縄文文化を入れるべき」とか、キーワードをどうするかという話もあると思います。それは別途協議いたしますので、今後の議論とさせていただけたらと思います。

(谷口委員)

切り離して良い問題なのかどうか、伺っていて疑問に思いました。別の事例で、新潟県立歴史博物館では、開館した時に館の名称をどうするか、議論がたくさんあったようです。

「縄文博物館」のような、縄文を全面に押し出した博物館にした方が、博物館の特色がはっきり出る形になるという意見もあって、私もそれは良い考えだと思ったのですが、結局、「新潟県立歴史博物館」という名称に落ち着きました。縄文だけを展示しているわけではないし、考古学に特化した博物館でもないで、無難なところに落ち着いたということがあるのですが、加曽利貝塚博物館の場合は「加曽利」が入っていて欲しいと思います。

縄文文化の調査研究・発信の日本国内の拠点形成を目指すわけですから、その性格が全面に出る名称にならないと、例えば「千葉市立加曽利貝塚博物館」のような形に落ち着いていくと、特色というのが名称から発信できることはすごく大きいと思うので、この場で決めるということはできませんが、引き続きこの委員会が関わっていただけたらいいなと思います。

(赤坂委員)

谷口先生のお話にも私も同感します。しかし仮称を入れるといろいろなところからご意見が出てしまうので、佐久間課長は「仮止め」という気持ちなんだなと思って聞いておりました。

名称については、特徴が表れる名前を慎重に付けてほしいとも私もあります。結局特徴のない名前になってしまう例もあります。私も実例を知っていますので、大事にしていきたいと思います。

(事務局：佐久間課長)

赤坂先生のおっしゃるとおりで、そのように進めていきたいと思っています。少なくとも、「加曽利」という名前と「縄文文化」というキーワードは必要になっていくと思います。

今の名前では加曽利貝塚の博物館という名前です。今の博物館計画のコンセプトとしては、縄文文化の研究拠点を掲げているので、名称についてはコンセプトを反映させた名称であるべきと考えております。

(今村委員)

私も先ほどの先生と同じ意見です。それで、この紙面ではどうするかというのを会議では決めるべきだと思うのですが、最終的にこの計画はどなたが読みますか。

(青木委員長)

計画案として出版されるので、市民、一般、専門家を含めて対象者は全てです。

(今村委員)

そういうことだと、谷口先生がおっしゃったような疑問を持つ方は多くらっしゃると思います。名前に「縄文」がついたほうが良いとか、もう少し柔らかな名前があったほうが良いとか、そういう風に思われる方もいらっしゃると思うので、これは正式名称じゃないということ明記する必要はある気がします。

(仮称) と入れるか、「特別史跡加曽利貝塚新博物館（正式名称は今後検討）」の方が誤解は招かないと思います。市のご事情もあると思いますが、読み手の視点に配慮されるのが良いのではないかと思います。

(中村委員)

私も長い間、博物館に携わって、名称が非常に重要ということは見てきております。(仮称) と付けると、仮称を取り除いただけで名称として決定してしまうような作業で終わることがあるので、事務局がそれを気にかけて、名称は今後真剣に議論していこうという現れでこのようにしていると思います。

愛称は、特に市民からたくさんの意見を聞く作業が出てくると思いますし、ぜひやっていただきたいと思います。ですから、今のお話のように正式名称は今後議論すると注意書きがあると一番わかりやすいと思います。

(高橋委員)

谷口先生がおっしゃるような具体的な名前について、先々を踏まえて練っていくということであえて「新」を入れているならば、これから 30 年 40 年経っていつまでも新博物館じゃないというのは誰もが思うわけであって、当然ここでは「新」をとってその代わりに何かを入れるだろうというのは皆思うと思います。

なので、ここにどんな言葉を入れるか、どう調整するかは今後ご検討いただきましょう。中村先生もおっしゃったように博物館の名前は非常に重要で、そこに性格規定を含めるようなことまであるでしょうから、その点については市民感覚も含めて今後の検討課題として事務局で練っていただければ良いと思います。そのためにここに(仮称) と入れる必要はあるのですが、入れてしまうとそのまま(仮称) がスライドしてしまうイメージがどうしても残ります。

私は豊かな経験ではないのですが、こういうことが起こりうるので、どう担保するか。これはぜひ検討していただきたいと思います。私はここに「新」を入れたのはそういうイメージがあるという思いで聞かせていただきました。ただいずれ取るなら、(仮称) を入れても問題ないと思います。

(設楽副委員長)

私も同じ意見です。谷口先生がおっしゃったように(仮称) とつけるか文章に「本決まりじゃない」ということを謳っておかないと、独り歩きしそうなことを危惧します。名称問題は非常に重要な問題なので、答申はこれでいいと思うのですが、来年度答申後、この委員会で名称問題をどうするかを話し合っていくほうが良いのではないかと思います。

(青木委員長)

私としては(仮称)を入れるかを含めてこの問題を事務局と話したことがあります。名称は市が見直すと明確におっしゃっていますし、手続きについては様々な行政上の条件や委員の意向もあります。

とりあえず新博物館と現博物館の意味合いを理解するための区別で、今村委員のおっしゃるように一般の人にはわかりづらいかもしれませんが、その点を今から議論すると支障があるので、今回の答申はこの文章でと案を出したわけです。

名称は見直す前提で委員の皆様には理解していただき、訂正しない形で承認していただければありがたいと思いますが、いかがでしょうか。高橋委員がおっしゃったところが穏当だと思いますが。

(谷口委員)

答申にあたっての附帯意見の中に、名称についての一文を加えるのはいかがでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

附帯意見については委員の意見を答申にあわせて付していただくものですので、全く問題ありません。

(谷口委員)

それであれば基本計画案は現状のように示しておいて、附帯意見の中で今後名称については慎重に検討していくという趣旨の一文を加えていただくのはいかがでしょうか。

(青木委員長)

委員の皆様、附帯意見に名称についての一文を載せる方向性でご了解いただけますでしょうか。

(委員一同)

異議なし。

(青木委員長)

それでは、附帯意見でどうするかを議論させていただきたいと思います。佐久間課長、よろしいですか。

(事務局：佐久間課長)

ありがとうございます。よろしくお願いします。

(青木委員長)

他にございますか。

(高橋委員)

34 頁の魅力向上のための取り組みで3つのエリアに分けて書いていただき、非常にわかりやすい。(1)は市内での連携ということで、既存の組織、センターとの連携。(2)は県内の縄文遺跡関連施設での連携、(3)が国内の縄文関連施設との連携。

市内から始まって県内国内と大きく輪を広げて連携体制を広げていこうという気持ちはよくわかります。

ひとつ気になるのは(3)の冒頭に世界文化遺産という言葉が出てきて、2行目・3行目に成田国際空港という言葉が出てきて、ここまで来て国際的連携はないのかと。

この文言が出てくる中で相当悩まれたと思いますが、(4)として国外の研究組織や研究機関との連携というのは検討したのではないかという気もするのですが、世界的にも縄文文化は高く評価され、いろいろな形で紹介されるような時代になりました。アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアにも等しく貝塚というのがありまして、加曽利貝塚に匹敵するような大型貝塚も知られるようになりました。そういったところからも連携やいろいろな形で調査の依頼、一緒に研究しようという申込は増えると思います。ましてや世界遺産となったときはそういった部分がかかり出てくるので、国際的な取り組みについてもどこか一文が必要だと思いました。

ただし、今(4)をつくると大変なので、(3)に国内外という文言を増やして、縄文に限らず先史遺跡、あるいは先史時代遺跡が入ってくるといいますので、これを加えて縄文の魅力を世界に発信するとともに、世界的な研究機関・研究者との連携も考えるという文言を加えたらどうかと考えるのですがいかがでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

ここは庁内でも、日本国内、県内はもちろん、世界遺産の北海道・北東北との関係性からどうするのかという議論があり、このような記載にさせていただいた関係があります。

現実的なレベルとしては(2)の県内、それから東京湾岸の貝塚ネットワークを第一と考えております。その後国内、世界に向けてというのは最終的な目標と考えていますので、先生がおっしゃるとおりだと思います。かなり先の目標になりますが、当然視野として入れてあります。

市民からはこれを機にもう一度世界遺産を目指して欲しいという意見もいただいておりますので、それは視野として入れていかなければいけないと考えております。

(高橋委員)

佐久間課長、もちろんそういった世界遺産を目標に掲げていくことは非常に大事なことだと思うし、ぜひそうなってほしいと思いますが、私が申し上げているのは、縄文に対する世界的な関心の高まりについてです。テレビの番組にもなっているし、イギリスのヨーク大学でも、今までなかった科学的分析方法を使って日本の縄文土器の同位体分析から魚食文化が昔からすごく発達したとか、いろいろな分野での研究が発展してきまして、各分野で加曽利貝塚のデータが欲しいとか、一緒に研究しようとかの連携の申込が出てくるといいます。

そういった場合にそれをどこで対応するのか、あらかじめ国内だけでシャットダウンするというスタンスではなくて、日本で特別史跡として加曽利貝塚は貝塚として初めてですので、そういったことまで射程を伸ばせる文言をどこかに加える必要があるのではないかと考えているのですが、その点いかがでしょうか。

(青木委員長)

ありがとうございます。可能かわかりませんが、世界文化遺産である北海道・北東北の縄文遺跡の構成遺跡をはじめ、その次の文章を少し書き直して、「国内外の先史時代遺跡や博物館と連携し」というように直すということでご了解いただくことは可能でしょうか。

(高橋委員)

私はまったく構いません。賛成です。

(青木委員長)

佐久間課長はいかがでしょう。

(事務局：佐久間課長)

異存ございません。ありがとうございます。

(青木委員長)

ではこの部分は私が申し上げた趣旨で少し訂正していただければと思います。

(事務局：佐久間課長)

かしこまりました。

(青木委員長)

先生方よろしいでしょうか。

(委員一同)

異議なし。

(青木委員長)

他にございますか。

(中村委員)

34 頁の（３）国内外の縄文遺跡及び関連施設の連携に直さないといけないですね。それ以外に 10 頁の「新博物館のコンセプト」についてです。むしろ資料 2 の概要版を見てお聞きしたいのですが、「新博物館のコンセプト」の下の方に 4 つの白い囲みの文章があります。これはどういう構造になっているのかを 1 回見てもわからないし、3 回読むと私なりに理解できるのですが、この 4 つの並べ方と中身はどういうコンセプトに盛り込もうとしたのか、もう一度事務局から解説してもらえませんか。

(事務局：佐久間課長)

今の先生のご指摘は配列が間違っているということでしょうか。

(中村委員)

配列が間違っているということより、この 4 つが何を主張したいかがわからなくて。たくさん言葉が並んでいるのですが、その 4 つの並び方も含めて何を意図しているのかを説明してほしいです。

(事務局：佐久間課長)

了解しました。元々ここは事業活動の方針の内容として書いたものなので、それをコンセプトとして持ってきています。このコンセプトを実現するための事業の内容としてこの 4 つを実施するというイメージで書いております。1 つ目が「調査研究」、2 つ目が「体験の機会提供」、3 つ目が「考え、発信する場の提供」、4 つ目が「身近であって誰もが参加できる場」という 4 つです。コンセプトに基づいて博物館がやるべき、基本方針等に繋がる 4 つの要をここに掲げているということです。

(中村委員)

私は縄文文化の実情を明らかにする事と縄文時代の空間を再現する事、いつも身近にある事、未来に活かす事だと（認識していました）。

過去から未来へというコンセプトをここでもう少し具体的に示すものではないかと思いま

す。それでもう1つ、「生きている縄文」の間に、「学び、体験し、考える」という言葉が入りましたが、この中身を4つ示しているように思います。この4つは「学び、体験し、考える」というものの中身であるというように持っていく方が分かりやすいと思ったのですが、いかがでしょうか。

（事務局：佐久間課長）

はい。「学び、体験し、考える」というのは市民の方々にしていただくことで、こちらは博物館がそれに対して行う形なので、この3つはその裏返しだというのは先生がおっしゃるとおりだと思います。

最後の4つ目がみんなでつくる博物館に繋がることになるのですが、誰もが参加できる場という前の3つとは観点が違うものが1つ加わっているという理解でおります。

（中村委員）

この「学び、体験し、考える」を、この4つの枠の前に持ってきたほうがわかりやすいのではないかと思います。

というのは「学び、体験し、考える」というのは博物館のコンセプトというより教育のコンセプトですよね。博物館のコンセプトは「生きている縄文」、「未来への道しるべ」で教育のコンセプトとは分けて、もし2本柱にどうしてもするということであれば、「学び、体験し、考える」と大きく下にその4つの囲いの上にもってきて示したほうがわかりやすいのではないかと思います。

もう1つやっていただくと、「学び、体験し、考える」という言葉は、このように概要版で大きく出ると教育関係の人には非常に良いけれど、私は博物館に長年携わってきて、博物館でこういうことをPRする事はあまりないです。この言葉では、一般市民や子どもたちにとっては少し引いてしまいます。ですから、これは上の2行からは別に立てたような教育のコンセプトということで4つの上に持ってくる。文字は少し大きめにした方がすっきりすると思います。訂正ではないですが、構造として博物館のコンセプトと教育のコンセプトで分けて示したほうが分かりやすいのではないかと思います。これは訂正ではないですが、文字の配列や4つの発信提供ということ、「学び、体験し、考える」というものの意味合いということで、やはり全体的なコンセプトの流れを持ったほうが良いのではないかと思います。

新博物館をPRする時に、「学び、体験し、考える」ということは教育分野の人にとっては非常に説得力があると思うけれども、一般市民にとっては学校の延長線上のような雰囲気（引いてしまう）。教育としてこういう効果は絶対に必要だと思いますが、普通、博物館行政ではやりません。

文言の使い方はこれから上手に使うこととして、コンセプトはより効果的に発信されると良いかなと思いました。意見です。

（青木委員長）

中村先生の今の意見については、今村委員、いかがですか。

（今村委員）

中村先生、素晴らしいです。私もこの四角は、改めてそう聞かれるとどういう項目だったのかと考えさせられました。確かに内容が、「学び、体験し、考える」ということだと思えば、

そのキーワードをこの箱の中に入れてあげれば良いだろうという気がしました。

いきなり学びから入ると、中村先生がおっしゃるとおりハードルが上がるかもしれないので、この4つの箱の並び方を変えて、4つ目の「現代と縄文時代をつなぐ存在としていつも身近にあり〜」というのを一番前にもってきて、いつも身近にあり、学び、体験し、考える、ことができるようなメッセージを伝える並びにしたらどうかと思いました。

この段階にきて大幅な修正は難しいと思いますが、今の考え方を反映するのであれば、並び方を変えて四角の横か右上くらいに、「身近にあり、学び、体験し、考える」というのを少し加えて表現するのがいいのではないかと思います。いかがでしょうか。

（青木委員長）

今、今村委員がご指摘したように、全面的に解決することは難しいと思いますので、委員の皆様もそれは了解していただけたと思います。できるだけ小さな改正にまとめたいと思いますが、例えば先ほどの中村先生のご指摘のように「生きている縄文」が下の「学び、体験し、考える」をこの4つの括弧の上に移動させることで、佐久間課長は対応いただけますか。

（事務局：佐久間課長）

この配列をどのようにすればいいか、私は今イメージが具体的に把握できていないのですが、箱の上に学びを持っていくということですか。

（青木委員長）

「生きている縄文ーそれは未来への道しるべー」、その上に文章が続いて、その下に文章と四角の4つの囲いの上に、「学び、体験し、考える」という位置づけです。ですから、「学び、体験し、考える」を下へ移動するだけです。

おそらく市長説明等もすでに終わっていると思いますので、あまり修正することは無理だと思います。

（事務局：佐久間課長）

そうですね。「生きている縄文 学び、体験し、考えるーそれは未来への道しるべー」をコンセプトとしてこれまで説明してまいりました。

中村委員のおっしゃるとおり、「学び、体験し、考える」は博物館のコンセプトではなく、理論的には教育普及のコンセプトではないかというのは、確かに学問的には正しいのかもしれませんが。今の形で整理するとなると、コンセプトを「生きている縄文ーそれは未来への道しるべー」として、「学び、体験し、考える」は副題ではなく、1つ次元が下の教育普及のコンセプトというのが、理論的な形のコンセプトになると思います。

しかし、これまでの我々の説明は1つのもので説明してきていますので、今の変更は説明が必要になり、どういう説明にすれば良いのかなというところが迷うところです。

（中村委員）

「それは」というフレーズの意図は何ですか。「生きている縄文」を「それは」にしたけれど、ここに入れたということはそちらのほうで「それは」を変えてしまいましたよね。

（事務局：佐久間課長）

これは「学び、体験し、考える」ことを通じて、ということを伝えたいという意図です。

（中村委員）

下の説明文の中にはその文言が書いてある。さらにその4つの箱というのは学ぶ中身、体験する中身が書いてあるということで、実はこの4つのほうがわかりやすいです。だから、具体的に「学び、体験し、考える」中身というのはここにある縄文文化の実像とか未来に生かせるものとか身近にあるものとか。そういうふうに整理していったほうが、構造的にはわかりやすい。申し訳ないが、この言葉は教育委員会の人たちにはいいけれども、市民や子供たちにとっては、あまりこういう言葉を全面的に示すのはむしろマイナスだと思います。

加曽利貝塚を貝塚とか土器とか土偶というものでイメージをアップさせる手はあると思いますが、「学び、体験し、考える」ということで教育関係者は喜ぶかもしれないけれど、一般市民へ、加曽利貝塚が勉強するところ、考えるところというイメージが付けられる気がする。そのためにここに言葉を持ってくるわけですね。それは私はやめたほうがいいと思う。来た人が「体験し、学ぶ」ののですが、今日は学べたなということで十分じゃないでしょうか。

なぜここで全面的に押し出すのか、私は長い間博物館行政に携わってきて、この言葉でこの計画の中身を薄めてしまうのではないかというのは気がかりです。後は何も言いません。市のご判断ですが、これからこれがあちこちに出ていくことになる、と考えていく必要があると思います。今後それは考慮して、表記は上手にやっていただければいいのかなと思います。

(青木委員長)

それでは谷口先生。

(谷口委員)

「学び、体験し、考える」というのは、以前私から意見を言った部分です。会議内ではなく、会議後に意見を求められたときに話したことがこういう形で反映されました。私はまず「生きている縄文」を新博物館のコンセプトにすることにはあまり賛成していませんでした。意味が分かりにくいので。それなら「縄文文化に学ぶ」とか、「縄文文化の価値を考える」とか、能動的な形が良いのではないかと一つの案として示したんです。

もう1つ、「縄文文化研究の拠点」などそういうことをコンセプトにしたらいいいのではないかと、2つの意見を合わせて示したと思います。それがこういう形で「学び、体験し、考える」という能動的な表現で採用されたのだと思います。

ですから教育普及を全面に出すべきという意味で意見を言ったつもりではなかったのですが、それがこういった形で反映されたということです。事情はそういうことです。

(高橋委員)

社会教育の立場で「学び、体験し、考える」というように言われているのではなくて、博物館の生涯教育的な立場で言われているのですが、今までの話を聞いていると、「学び、体験し、考える」、これが3つなんです。それで下の枠が4つあります。この辺のちぐはぐがどうも最終的に尾を引いているような気がしてなりません。

私は、博物館は一般市民の目で見るとは非常に大事だけれども、しかし博物館としてのコンセプトは、その前に「調べる」というのがあはずです。例えば「調べ、学び、体験し、考え、伝える」とか。そういうふうにすれば、下の4つは全部生きてきます。

左上には、調査研究によって明らかにすると言っているのだから、これは調べることです。

博物館の持っているコンセプトの一番重要な部分はここにあります。上の方の「学び、体験し、考える」というのがどこにも出てこない。もし、この前に「調べ」という言葉を入れたら、博物館全体のコンセプトを出すことに繋がりはないかなという印象を受けました。

(今村委員)

コンセプトがずれると全部ずれて大変なことになってしまいますが、私は「学び、体験し、考える」のところに「考える」があるのが、この博物館の大事なところだと思います。

それと、2千年というのがこの縄文が長く続いたキーワードだと思っています。今は2022年ですが、西暦が始まって今日までの長さと同じくらい続いた場所がここなんだと投影して考えられるので、そういう意味で「学び、体験し」だけで終わらず、「考える」というメッセージが入っていることが他の博物館との大きな差別化になると考えています。これは今、いろいろ議論がありますけれども、このまま残してやっていけば良いのではないかなと考えています。

もしかしたら「学び、体験し、考える」という小さな文字が、「生きている縄文」の上にある、「学び、体験し、考える 生きている縄文、－それは未来への道しるべ－」という語順のほうが良いのかもしれないなという気はします。

なぜかという、そうすると「生きている縄文－それは未来への道しるべ－」というところが割と大きなメッセージになってくるので、他の博物館と違うということが伝わる気がします。

(赤坂委員)

私は大方これでいいのではないかと思います。教育の立場が強い印象というご意見ですが、それはこの博物館の持つ大事なところであると思います。要するに大事なところを2度3度繰り返している、強調したいところだと思います。

言葉を変えていることが、キーワードを手を変え品を変えているくどさがあるのかもしれませんが。この四角に囲まれた文章の意味というのは、上2つと左の方は「学び、調べ、体験し」を表現するもので、下の右はこの場所があることの意義を語っているのではないかと思います。私の意見は以上です。

(青木委員長)

それでは皆さんご意見出尽くしたようですので、まとめてみたいと思います。「生きている縄文」は高橋委員がおっしゃったように、「調べ、学び、体験し、考える－それは未来への道しるべ－」という形で直す方向で考えたいと思いますが、その辺は佐久間課長、よろしいでしょうか。今までの庁内での説明と整合性は取れますか。

(事務局：佐久間課長)

「調べ」については、高橋委員のご指摘はもっともです。私共としましては、アクティブラーニングとして「学び」という言葉に含まれている認識であります。

「学ぶ」という言葉は、受動的に学ぶだけではなくて、アクティブラーニングと言われるとおり、自ら学ぶことも当然含まれている認識でしたので、調べという概念は学びの中に含まれているという思いでこれを作っていたところです。

そのため、「調べ」を他の体験と考えるというのと並列することには違和感があります。

(青木委員長)

庁内ではそのように説明しているということですね。

(事務局：佐久間課長)

はい。

(設楽副委員長)

先ほどの高橋委員の意見は面白いと思いました。というのは「学び、体験し、考える」は来館者の目線ですが、これは新博物館のコンセプトなので、職員目線でのコンセプトとしてもとらえないといけません。学芸員の一番やらなければいけないことは調査研究です。そういう意味でもこれは「調べ」は入れたほうがいいです。それで下の4つと整合を取る方が、非常にじっくりくるかなと思って伺っておりました。

(中村委員)

私は、「生きている縄文それは」っていうのを「未来の道しるべ」ということで、「それは」というのは「生きている縄文」そのものだと思いますので、それがここにもう一行入ることによって、何なのかなということなんです。

だから、「生きている縄文」が「学び、体験し、考える」ことになったわけですね。その辺りが「それは」があることでこの3つが非常にわかりにくいということと、それから本気になって調べるということは、それはそれでいいと思います。

ですが1つ、コンセプトは2本立てにすること。内向きのコンセプトと外向きのコンセプトをこのようにガチャガチャにすると、対外的には非常にわかりにくくなります。それか、もし本当に一緒にするなら1番上に持ってくる。「生きている縄文」の上に持ってくるようにしないと、「生きている縄文それは」と入るのは非常にわかりづらくて。対外的なインパクトも非常に小さくなるのではないかなと。私は2本立てにすることを主張します。

この言葉があることによって新博物館は勉強するところだと市民には映る。博物館はもっと楽しいところで、体験することや考えることは当たり前です。ですから、そういうことをこちらが打ち出すのは得策ではないと思います。

この文言とこれからの広報戦略を別にするというのであれば、むしろ2本立てにして、博物館はもちろん教育的な意義があるし、市民への場の魅力のものと別にするのがいいのではないかと思います。

(青木委員長)

今、委員の意見を聞いて、佐久間課長、ぎりぎり妥協できる点はどこまでですか。

委員の意見を聞いてみると、「調べ、学び、体験し、考える」を1番最初にもってきて、「生きている縄文ーそれは未来への道しるべー」という順番に変えるのが1つの案。

2つ目の案としては、このままの文章で学びの前に「調べ」をつけるか。

3つめの案はこのままでいくか。このままでいくのが1番ベターですけど。

(事務局：佐久間課長)

前に「調べ」という言葉を入れて4つの対比をとというのは、これまで内部検討の中で（「調べ」）は（「学び」に）含まれる感じでいまして、少しこれまでの説明とは異なる場所が出てくるという印象はあります。

中村先生のおっしゃっている、これからの展開として「学び、体験し、考える」というのはあくまで副題なので出し方に気を付けるというのはおっしゃるとおりだと思います。少し押しつけがましいところがありますので。

第一義的コンセプトは「生きている縄文」ということになると思います。

(青木委員長)

それでは「学び、体験し、考える」を「生きている縄文」の上にする案はどうですか。

(事務局：佐久間課長)

それは表記の問題ですが、どちらが副題なのかという懸念が出てくると思います。今は「生きている縄文」がメインコンセプトですが。

(赤坂委員)

順番を変えたとしても「生きている縄文」が太い大きな字ですよ。

(青木委員長)

そうです。それで上に「学び、体験し、考える」を小さい字に入れる。

あるいは「学び、体験し、考える」を「－それは未来への道しるべ－」の下に持ってくるのはいかがでしょうか。

(事務局：佐久間課長)

「それは」は「学び、体験し、考える」を通じてということの意味していますので、順番を変えるのは少し意味が違ってくると思います。

(青木委員長)

上に持っていくならば、今までの庁内説明と整合性を持たせられますか。

(事務局：佐久間課長)

大きくは変わらないと思いますが、「学び、体験し、考える」がメインのように捉えられる可能性があります。

(青木委員長)

本日、附属機関として答申するので決めなくてはいけません。今まで庁内でも説明して、市長の了解もされてきていると思います。大変申し訳ないですけど、そもそも論になると議論が終わらないので、私としては中村先生には申し訳ありませんが、このままの状態を通していただいて、今後の広報に関しては、その点について配慮するということでご了解いただけたらありがたいと思いますが、いかがでしょうか。

(中村委員)

意味合いとしては大切なことだと思いますので、広報の時、特に市民に向けて発信するときは、こういった文言に位置付けていただくということで、委員長のご判断に従ってお任せしたいと思います。

(青木委員長)

大変申し訳ありませんが、いろいろあると思います。ご了解いただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

(中村委員)

承知しました。

(青木委員長)

ほかにご意見ございますか。

(今村委員)

小さなことですが、よろしいですか。その前に先ほどのところの「学び、体験し、考える」を上を持ってきても、「生きている縄文」が一番大きいので、それが一番大きなメッセージになるので、あまり心配はしなくても良いのではないかと思います。

それからもうひとつ、今の概要版の続きで、「生きている縄文」の文言で「ーそれは未来への道しるべー」の下の記事のところに、「数千年の長きにわたり…」とありますが、計画書案との整合性をとるならば、「2千年」に修正していただきたいです。それが重要なメッセージだと思うので。

この文章の「数千年」では幅がありすぎるし、概要版も2千年に統一して書かれたほうがいいのではないかと思います。

それと、概要版は良くまとまっていますので、ここは読んだ人が良くわかるよう、親切に書いた方がよいと思います。

例えばSDGsが2か所出てきますが、SDGsに関する補足の※がついています。最初にSDGsが出てくる②のところ、新博物館の基本方針の②のSDGsのあとには※を入れてあげる、それからその下のSDGsに基づく新博物館の取り組みのSDGsにも※を入れて市民にも読みやすくしてあげてほしいです。細かいところすみません。

(事務局：佐久間課長)

2千年と数千年の記載ですが、2千年は加曽利貝塚が続いた期間、数千年は縄文時代が続いた期間として使わせていただいているところです。

(今村委員)

そのように使い分けしていたのですね。失礼しました。では、ここは数千年でよろしいですね。

(事務局：佐久間課長)

この記載を2千年にすると縄文時代は2千年だけではないと逆にとられてしまいますので、このご理解をお願いします。

(今村委員)

わかりました。それと、基本計画本編の18頁まではとても良くできていて、早くこの博物館ができあがるのを見たいと思うのですが、わかりにくく感じる記載が49頁から出てきます。

その前にこれも概要版との整合性なのですが、概要版の裏面で常設展示の説明がありますが、常設展示は探求型展示で加曽利ラボというのがありますが。これは(鍵括弧付きの)「加曽利ラボ」になっています。これは加曽利ラボとか縄文体験空間とか、次の対話型展示などの未来ラウンジのところはこの「」(鉤括弧)は強調したいところだと思いますが、それで合っていますか。

ところが基本計画本編は、例えば26頁の常設展示の説明は(丸括弧付きの)(探求型展示)になっています。加曽利ラボや縄文体験空間は目立たせたいところなので、ここは「」

(鉤括弧)にさせていただくのが良いと思います。

そしてこの概念をわかっていない読み手が混乱しそうなのが、49 頁です。この計画書自体は連番を 1、2、3、と振って、1 の中に細かくわけるときは (1)、(2)、(3) がでてきて、(1) を詳しくしたいときはア、イ、ウになります。ア、イ、ウを細かくしたいときは (ア)、(イ)、(ウ) になります。そういった書き方は 1 枚のページの中に全部収まっていれば理解できますが、これが数頁にわたるとついていけなくなる。それが 49 頁のあたりです。

49 頁のスタートはテーマ構成が 2 としてあって、(1) 常設展示というのが出てきます。常設展示の中に加曽利ラボ、縄文体験空間、未来ラウンジというのが出てきますよね。それとデザイン的な問題ですが体験型とか没入型展示の、どちらが目立つかというところと黒帯で白抜きにしている方が目立ってしまう感じもするので、ここは気になるところでした。

また、この中にア、イ、ウを振っていただけないと、次の頁のアにつながりにくい。ア、イ、ウを振ってあげたほうが、次の頁が読みやすくなるような気がします。私たちはこの構成が頭に入っているので読めますが、初めて読む方にとっては少し迷子になりそうだなという気がしました。

そして、アの下には特徴の①、②、③が出てきてしまい、そこからまた頁を開くと 52 頁になって今度 (ア) が出てくるので余計にわからなくなります。もしかしたら 50 頁の特徴は、1、2、3 を振らないで、大きな「丸ぽつ」でいいのかも知れないと思いました。

それでアのことを読んでいるうちに、52 頁になると (ア) が出てくるので、ここは加曽利ラボ展示室になっているけれども、ここは文言をあわせて、探求型展示室「加曽利ラボ」展示室という風に言葉を合わせていただきたいと思います。校正作業のような指摘で申し訳ありませんが、同じように 53 頁のアクティブラボも探求型展示「加曽利ラボ」のアクティブラボだということが抜け落ちているので、多分ついていけなくなると思います。このような観点で、54 頁くらいまで表現を揃えていただければと思います。細かい指摘で申し訳ありませんが。

(青木委員長)

重要なところですのでご指摘ありがとうございます。これは校正上の問題ですので、事務局で読みやすいようにご検討ください。よろしくお願いします。

(事務局：佐久間課長)

ありがとうございます。我々行政ですと、この番号の振り方が公用文の項目立てのルールになっていますので違和感なかったのですが、一般の方が読んだ場合は今村委員がおっしゃるとおりわかりづらいと思いますので。

特に特徴の下①②③は我々も迷っていたところですので、最後校正の時に、どの項目の位置づけかわかる形で見直したいと思います。

(今村委員)

アイウは民間では使わないので。

(事務局：佐久間課長)

行政上のルールで順番は変えられないですが、その中で加曽利ラボの展示室とかアクティ

ブラボとか、わかるような形でご指摘を踏まえてわかりやすくしていきたいと思います。

(今村委員)

わかりました。よろしくお願いします。

(青木委員長)

ありがとうございました。想定した時間をかなり過ぎています。最後ですので委員の皆様
の意見を聞いたほうが良いと思い、時間オーバーを厭わずやっていますが、議事を進め、附
帯意見をとりまとめたいと思います。

それでは、新博物館の計画について委員の皆様はご了解いただけますでしょうか。

(委員一同)

異議なし。

(青木委員長)

それでは基本的にご了解いただいたということで、次に私から事前に委員に案をお伝えし
てありますが附帯意見についてです。

新しく博物館を整備するにあたって準備室を設置したり、条例を改定したり、設置規則を
作ったりしなくてはいけません、今まで委員の皆様から一番議論があったことについて、
基本計画の中ではあまり具体的に触れていませんので、3項目を附帯意見として留意してい
ただきたいということで、私から案を出しました。

1 番目は、「特別史跡にふさわしい組織体制の整備」で、要するに博物館の運営は研究面
も含めて直営にしますが、きちんとした形で人材確保に努めることをお願いしたいというこ
とです。

2 番目は、史跡は特別史跡に指定されましたが、遺物も重要文化財にしていく方が良いの
ではないかと思いますし、そのためにも公開承認施設とかいったものもセッティングしてい
ますので、その部分について具体的に議論して推進していただきたいと思います。資料の学
術的評価は、検討しなくてはいけないところはまだありますので、その部分も当然のことな
がら進行させていただかなくてはなりません。

3 番目は、外部資金の獲得が委員の意見でたくさん出てきております。科研費のような公
的な競争資金を得るためには、研究機関の認定など様々な問題があると思いますし、適切な
対応をとっていただきたいと。

また、寄附金等をいただいたときに適切に執行しなくてはなりませんので、体制的に配慮
してほしいということを附帯意見としたいと思いました。

もう1つ、先ほど博物館の名称について附帯意見をつけたということですので、谷口先
生に具体的に文章を考えていただいて、事務局へ送っていただけますか。

(谷口委員)

文章については青木先生の方にお任せしたいと思います。

(青木委員長)

わかりました。それでは私の方で、新博物館の名称についての附帯意見を4番目として文
章を検討して事務局へ送りますので、それを改めて委員各位へ送って了解をいただくように
まとめ上げたいと思います。

そういう方向性で附帯意見をつけるということによろしいでしょうか。何かご意見ありますか。

設楽副委員長、いかがでしょうか。

(設楽副委員長)

それで結構です。今の附帯意見に関してはどれもこれも大事なことです。これから先まで委員会で揉んでいくとともに、準備室を立ち上げてそこでみっちり議論していただければよろしいかと思います。

(青木委員長)

ありがとうございます。他の先生方いかがでしょうか。

(赤坂委員)

23・24 頁について、これまで情報発信の大切さについてお話が出ていましたが、私もそれに賛同するものですけれども、なかなかこうやってずっと一緒だったものでしっかりと分けていくものは。特に加曽利に関してはアカデミズムに先行して、市民運動で保存が始まりました。人もいってみれば3 番の情報発信の公開、いわば社会的な関心を土台にしていたということではないかと思いました。ですので、特に地元を味方に引き入れ、千葉市民に愛される博物館になってほしいなと思っております。

(青木委員長)

ありがとうございます。他によろしゅうございますか。それでは時間をオーバーしていますが、この答申案と附帯意見については、皆さんにご了解いただいたということで、事務局に返したいと思います。皆さんの今までのご努力ありがとうございます。お礼申し上げます。ありがとうございます。

それから先ほど設楽先生の方から訂正指摘がチャットで届きましたので、それを事務局で見させていただいて反映していただければありがたいと思います。

私の不手際でだいぶ長くなりましたが、事務局へ進行をお返しします。

(事務局：佐久間課長)

委員のみなさま、長時間にわたるご審議、誠にありがとうございました。本日いただいた修正点はまとめまして、青木委員長にご確認いただいたうえで最終案に反映させていただきたいと考えております。

いただいた答申の附帯事項についても、青木委員長からお示しいただいた3 点の他に、谷口委員からご提唱のあった名称に関する部分についても付け加えまして、最終的な答申書の形にこれも青木委員長の確認をいただいたうえで、答申書の文面とさせていただきたいと考えております。

最後に今後の予定をお話しさせていただきます。今日、これからまとめる形になりますが、最終的な形をまとめさせていただき、2 月の教育委員会会議に最終案を付議させていただく予定です。この教育委員会会議に諮らせていただいて、議決が得られれば最終的な計画として策定となると考えております。その後、議決が得られれば公表となります。私の方からは以上です。

(事務局：森本主査)

それでは委員の皆様、お忙しい中、長時間ご審議いただき、ありがとうございました。以上を持ちまして、令和３年度第２回千葉市史跡保存整備委員会を閉会いたします。

——了——